

● 地区一貫教育 ●

小・中学校が連携した子どもの学習や生活習慣の改善・定着を目指した取組

～メディアコントロールの取組とメディアに関する教育をとおして～

宮崎県 都城市立山田中学校（校長 田口国央）

- ① 山田地区におけるメディア使用状況の実態調査を行い、小学校、家庭や地域とタイアップして、児童・生徒のメディアコントロール力育成に係る取組を行った。
- ② 生徒に対してメディアに関する知識の習得、メディアの有効性や非有効性の理解、メディア活用能力の育成を図り、メディアコントロール力の醸成を図った。
- ③ 本研究をとおして、メディアを適切に使用する資質や能力を育成し、本校生徒のインターネット依存度傾向の改善及び学習習慣や生活習慣の改善を図った。
- ④ メディアコントロール週間中やその前後における生徒の学習時間、メディア使用時間や睡眠に関する調査を行い、取組の効果を検証した。

〔はじめに〕

本市は、宮崎県の南西部に位置し、盆地の中に人口16万人あまりを有しており、歴史的にも鹿児島県の薩摩藩と深い関わりをもつ城下町として知られている。

本校は都城市の北西部に佇んでおり、165名の生徒が在籍している。目前に雄大な霧島連山を臨み、豊かな大自然に包まれ、生徒各々が素朴な感覚をもったのびのびと育っている。

そのような子どもに寄り添う形で、地域からの支援も盛んで、朝の登校時の見守り活動や放課後の学習支援など積極的な関わりが見られる。地域の期待に感謝で応える子どもの姿勢は、本地区での大きな特徴にはなっているが、近年情報の取扱いの課題は重大さを増している。

Ⅰ 研究の概要

1. テーマ設定の理由

昨今、長時間の情報端末機器使用に起因する健康問題や学力低下問題などが深刻化しており、山田地区内においても、メディアを取り巻く諸課題が浮き彫りになっている。

本校の実態として、携帯やスマホを1時間以上使用する生徒は80%と高く、学習時間よりも情報端末機器の使用時間が長い実態が見られた。また、厚生労働省研究班が示したインターネット依存度傾向調査を本校生徒向けに改訂して実施したところ、42%の生徒に、インターネット依存症が疑われる実態が明らかになった。山田地区内の小学校においても低学年からの情報端末機器使用に関する問題や、中・高学年に

おける長時間の情報端末機器使用問題が明らかになった。深夜に及ぶメディア使用が、児童及び生徒の睡眠や学習習慣に及ぼす影響が危惧された。

情報化社会の進展やインターネットの普及により、メディアは我々の生活から切り離せないものになった。しかし、過度なメディアの使用が引き起こす健康被害や学力低下問題などは、本校や山田地区内の喫緊の課題と言えるため、本テーマを設定した。

2. 研究の方向

情報端末機器を中心としたメディアをめぐる諸課題の原因を考察すると、本校生徒には以下の4つの知識や技能が欠如していることが予想された。①メディアに関する基礎的な知識、②メディアの有効性や非有効性の理解、③情報モラルや情報リテラシーの理解、④メディアをコントロールする力である。

そこで、本研究の研究仮説を、「メディアに関する知識や活用能力の習得を図ることで、メディアコントロール力の醸成に繋がり、生活習慣や学習習慣が改善されるであろう。」として研究を進めた。本校の教育活動をとおして、生徒はメディアに関する知識や技能を習得し、メディアを生活や学習へ有効に活用したり、メディアの過度な使用を自ら控えたりするなど、メディアに関する意識や行動の変容を促した。

本研究は学校、家庭、地域の関係機関が連携して研究に取り組む必要がある。そこで、実態調査結果を家庭や地域に積極的に発信し、メディアコントロール週間を研究に関連付けることで、連携の充実を図った。

3. 研究のゴール目標

(1) メディア使用時間やインターネット

依存度傾向の改善

本研究は、生徒に適切なメディア使用を促すことで、①メディア使用時間が学習時間を下回ること、②インターネット依存度傾向を数値的に改善することを目標とした。以下のデータは、1学期始めの本校生徒の実態である。

	1 学年	2 学年	3 学年
学習時間	94 分	111 分	120 分
メディア使用時間	116 分	115 分	114 分

山田中学校の生徒は、平均して情報端末機器を中心としたメディアの使用時間が学習時間よりも長い。

◆【学習時間やメディア使用時間の実態】

適応的使用者の割合 = 58 %
 不適応的使用者の割合 = 35 %
 病的使用者の割合 = 7 %

42%の生徒が、インターネットを自己の力で適切に運用できておらず、インターネット依存が疑われる。

◆【インターネット依存度傾向の実態】

(2) メディアコントロール週間の効果の検証

田中綾帆と野井真吾 (2016) らは、多くの学校現場では、家庭でのメディア使用時間を減らす取組や啓発活動が実施されているが、その効果を検証した報告は少ないと述べている。本校においても、メディアコントロール週間の取組の効果を検証するに至っていない。そこで、メディアコントロール週間とその前後における生徒のメディア使用時間、学習時間、睡眠時間などの変容を分析し、メディアコントロール週

間における効果の検証を図った。

Ⅱ 研究実践内容

1. メディアに関する校内研修

生徒に対してメディアに関する指導を行う以前に、指導する教職員が、メディアに関する知識や理解が不足していた。そこで、校内研修をとおして、メディアの理解を共有した。校内研修の内容は以下のとおりである。

- (1) メディアの定義の理解
- (2) メディアの有効性と非有効性
- (3) メディアを学習へ活かす方法及び家庭教育とメディアの連携
- (4) 情報リテラシー
- (5) 過度な情報端末機器の使用による脳、睡眠、学力への影響
- (6) 職業調べを関連付けたメディア活用方法及び生涯にわたる情報端末機器の使用時間の計算

2. メディアに関する学級活動の展開

校内研修で教職員がメディアに関する内容を共有した後、学級活動の時間をとおして生徒に指導を行い、メディアに関する理解を図った。

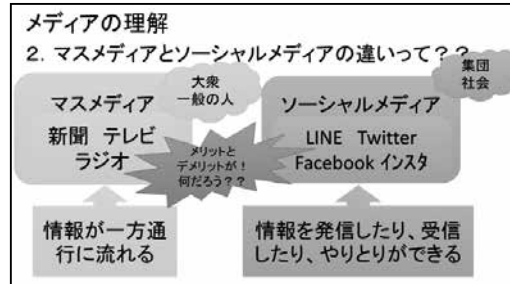
(1) メディアの定義の理解

「情報を伝える媒体」をメディアの定義としつつ、山田中学校の実態として、①携帯やスマホなどの情報端末機器、②テレビなどの受信機器、③ゲーム機器の使用頻度が高いため、中学校ではこれら3つの機器をメディアと定義付け、生徒はメディアに関する理解を深めた。

(2) メディアの有効性と非有効性

メディアは、多様な情報を発信及び受

信できる反面、受信した情報には信憑性が疑われる情報も含まれている。生徒は検索サイトによって情報が異なる例を比較し、メディアの有効性や非有効性について理解を深めた。



◆【授業で使ったスライドの一部】

(3) 情報リテラシー

生徒は、情報を目的に応じて的確に抜き出し活用できる力（情報リテラシー）について学習した。検索エンジンや検索サイトによって情報の量や質は異なり、目的に応じて情報を比較したり、取捨選択したりする必要がある。

生徒は「高床倉庫は、なぜ高床になったのか。」を例にしてインターネット検索をした際、サイトによって情報が異なることを理解し、情報リテラシーについて理解を深めた。

(4) 過度な情報端末機器の使用に起因する脳、睡眠、学力への影響

生徒は、年齢制限がある過度なゲームアプリを長時間使用することや、考えるより先に情報を調べてしまう日常の習慣化が、脳や睡眠に与える影響について学習した。また、日常的な1時間以上の情報端末機器の使用と、学力の定着の関係について学習し、過度なメディア使用と学力との相関関係について理解を深めた。

(5) 生涯の情報端末機器の使用時間の計算

生徒は1年間の情報端末機器の使用時間を計算し、その後、生涯にわたる情報端末機器の使用時間を計算した。更に「時給〇円」で使用時間をお金に換算した場合、どのくらいの価値の時間を情報端末機器に費やすかを計算した。それを基にして、自己の人生とメディアの付き合い方を関連付けて考えを深めた。

3. メディアに関する全校集会

全校集会を活用し、本校生徒のメディア使用時間や学習時間の実態を生徒に共有し、研究への意識付けを行った。生徒はメディアの利便性について考えを出し合い、メディアを学習や生活へどのように活かしているか意見を交換した。集会の中では、メディアの非有効性についても考えを深めた。「ラインの音が気になって学習の妨げになる。」「睡眠時間を短くして、メディアを使用したことがある。」など意見が出され、メディアが学習習慣や生活習慣に与える影響について理解を深めた。



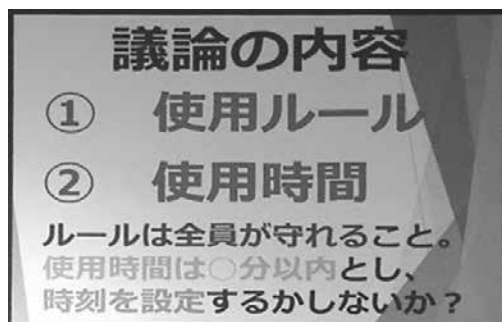
◆【全校集会の様子】

4. メディアに関する生徒総会

「中学校生活をよりよくするための情報端末機器の使い方を考えよう。」を議題とし、生徒総会が行われた。

生徒は平日や休日の情報端末機器の使用時間や使用上のルールについて、意見を出した。また、生徒会役員より、情報端末機器の使用時間と学力定着の相関関係や、都城市が全中学校へ啓発している情報端末機器のガイドラインが生徒に示された。情報端末機器の使用時間や使用上のルールを決める上での判断材料となり、議論を深めることができた。

生徒総会の結果、平日の使用時間は60分以内、休日の使用時間は90分以内と決めた。また、使用上のルールとして、①自分がやるべき事を終えてから使用する、②人を傷つけることを書かない、③個人情報が分かるものを載せない、④家族で利用のルールを2つ決めて守る、の4つが決められた。



◆【生徒総会で使われたスライド】



◆【クラスの意見を発表している様子】

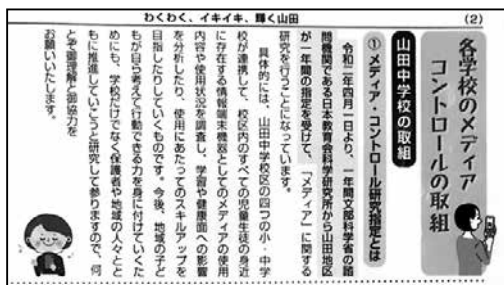
5. メディアコントロール週間

山田地区では、小・中学校が連携してメディアコントロール週間を実施している。家庭でのメディア使用を控え、家庭の憩いの時間を増やしたり学習や生活環境を整えたりすることを目的としている。5つのコースがあり、Aコース（メディア使用0時間）、Bコース（メディア使用1時間以内）、Cコース（食事と勉強中には使用しない）、Dコース（食事中のみ使用する）、Eコース（勉強中のみ使用しない）の5つのコースを生徒は選択する。家庭と学校が連携してメディアコントロール週間へ取り組んだ。

6. メディア通信の発行

本校生徒の情報端末機器の使用状況を調査し、実態を家庭や地域に発信するために、メディア通信を発行した。本校生徒の情報端末機器使用上のルールの有無、実際の使用状況、学習時間やメディアの使用時間などについて情報を発信することで、家庭や地域に対して研究への意識付けを図った。

また、地域の広報誌に各小・中学校のメディアコントロール週間中の学習習慣やメディア使用の状況を掲載し、学校と家庭・地域が共同で研究に取り組めるよう、情報を発信した。



◆【地域広報誌（いきいき通信）の一部】

7. 小・中学校共通実践事項

山田地区には3つの小学校が在り、小学校と中学校の共通実践事項に「家庭学習とメディア」が挙げられる。児童及び生徒は、学習する単元や学習内容に関して、メディアを活用して家庭での事前学習を行った。

授業において、児童・生徒共に、調べた内容を班やペアで共有することができた。学習内容の深まりが得られると共に、学習への意欲や興味・関心を高めることができ、小・中学校が連携して家庭学習とメディアについて関連付けを図ることができた。

理科事前調査		
○次の2つの国の、夏と冬の気候の特徴を調べよう		
	イギリス	日本
緯度	北緯 49° 19' 51 度	北緯 20° 16' 37 度
位置の特徴	北大西洋と北海の間 ・西ヨーロッパ	ユーラシア大陸の東 ・太平洋の北西角に島国

◆【メディアを使い家庭学習に取り組んだ例】

Ⅲ 研究の実際

1. 学級活動の感想

(1) メディアの有効性及び非有効性及びメディアリテラシーについての感想の一部

勉強などで調べたいことがある時にメディアを使うけど、自分の考えをまずもち、いくつかの情報を調べて、自分の必要な情報だけを抜き取って使用したい。また、「本当にこの情報は正しいのか？」を考えながら、学習や生活に活かしていきたい。

(2) 過度な情報端末機器の使用に起因する脳、睡眠、学力への影響について書かれた感想の一部

今まで長時間の携帯やスマホの使用は、「何か体に悪いことがある」とだけ知っていたけど、想像以上に影響があることが分かりました。

デジタル認知症という言葉を知りました。自分の携帯やスマホの使用状況を振り返られたので、これからもルールを守って使用したい。

6. 自分の将来を考えると・・・
現在の(携帯やスマホ)の使用状況はどうだろう?これから先、どうしたい??

今年になってから何故か使用時間が増えてきたと思っていました。自分も分からない問題を調べたりすることがあります。それによって親に怒られてしまったりからいって本気で進路について考えているのではないかと考えているので、近々、使用時間を減らしていきたいです。

◆【実際の感想の一部】

(3) 生涯の情報端末機器の使用時間の換算についての感想の一部

1年間で364時間も携帯を使い、時給800円で考えると1年間で291,200円分の時間を使っていることに驚いた。携帯の時間を減らしたい。

2. 全校集会後のメディア使用の振り返り

分からない単語の読みや意味調べに携帯を使い、学習に活かすことができている。また、学校行事を友達に伝える連絡手段として使うことができている。

◆【全体的な傾向】

PIに関する全校集会について (2)年()組 名前()
今まで携帯やスマホの使い方を振り返ってみました。
ええなこと、使えなかったことを書いてみましょう。
どうために、どうすればいいかを考えてみましょう。
携帯やスマホを使わない生徒は、山田中学校の携帯やスマホの使用状況をどう思うかを考えましょう。

使えなかったこと: 分からない言葉の読み、使えなかったこと: 睡眠時間を減らした。
や意味を調べた、好きなゲームをしてしまった。
相手に学校の準備などを伝える、学習時間よりも使用時間が多かった。
使えなかったこと: 分からないこと、使えなかったこと: 多すぎた。
使用時間を減らす。

◆【実際の感想】

IV 成果と課題

1. メディアの理解度及び学習習慣や生活習慣の変容

本研究では、生徒にメディアに関する知識及び技能を習得させ、適切なメディア使用を促すことで、生活習慣や学習習慣の改善を図ってきた。

そこで、メディアに関する知識・技能が習得できたかの調査と、学習時間、メディア使用時間及びメディア使用に関する調査を行った。尚、1回目調査は1学期の始め、2回目調査は1学期の終わり、3回目調査は2学期の終わりに行った。

(1) メディアの定義に関する調査

ア メディアの定義の理解の深まり

	第1回目調査	第2回目調査	差異
第1学年	40人	56人	+16人
第2学年	25人	44人	+19人
第3学年	36人	54人	+18人

イ 情報リテラシーの理解の深まり

	第1回目調査	第2回目調査	差異
第1学年	5人	13人	+8人
第2学年	1人	26人	+25人
第3学年	1人	34人	+33人

ウ 過度のメディア使用が成長、健康及び学力へ悪影響を及ぼす理解の深まり

	理解ができた生徒数	備考
第1学年	54人（58人中）	本校生徒の94%が、長時間のメディア使用が成長、健康及び学力へ悪影響を及ぼすことを理解できた。
第2学年	43人（44人中）	
第3学年	50人（58人中）	

エ 成果と課題

- 学級活動の時間をとおして、生徒はメディアに関する基礎的な知識、メディアの有効性や非有効性及びメディアの活用方法について理解を深めることができた。
- 第1学年における情報リテラシーの理解度を高める手立てが不十分であった。

(2) 学習時間、メディア使用時間、就寝開始時間、メディア優先度の調査

ア 学習時間の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
第1学年	94分	90分	92分	-2分
第2学年	111分	99分	93分	-18分
第3学年	120分	113分	145分	+25分

イ メディア使用時間

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
第1学年	116分	45分	56分	-60分
第2学年	115分	56分	74分	-41分
第3学年	114分	78分	69分	-45分

ウ 情報端末機器の使用時間の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
1時間以上使用する生徒数及び割合	126人（81%）	78人（50%）	102人（71%）	-24人（-10%）
2時間以上使用する生徒数及び割合	81人（52%）	25人（16%）	25人（17%）	-56人（-35%）
3時間以上使用する生徒数及び割合	32人（21%）	8人（5%）	5人（3%）	-27人（-17%）

エ メディア使用優先度の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
第1学年	26人	14人	27人	+1人
第2学年	25人	19人	16人	-9人
第3学年	27人	18人	23人	-4人

オ 就寝開始時間の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
第1学年	10:15	10:24	10:08	-7分
第2学年	10:40	10:51	10:59	+19分
第3学年	11:26	10:58	11:13	-13分

カ メディア使用時間の短縮による家庭での過ごし方の変容と人数

	家庭でのお手伝い	家族の団楽の時間	読書の時間	音楽を聞く時間	スポーツ
第1学年	18人	24人	13人	25人	4人
第2学年	8人	13人	14人	15人	5人
第3学年	22人	14人	9人	12人	4人
合計	48人	51人	36人	52人	13人

キ 成果と課題

- 情報端末機器を中心としたメディア使用時間が全学年において短縮され、学習時間を下回った。
- メディア使用時間が短縮された分、家族の憩いの時間や余暇に使う時間が増え、生徒の生活習慣に改善が見られた。
- 第1学年の3回目調査によると、携帯やスマホよりも学業を優先する割合を改善することができなかった。

(3) インターネット依存度傾向の改善

ア 第1学年の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
適応的の使用人数	38人	49人	41人	+3人
不適応的の使用人数	17人	7人	8人	-9人
病的な使用人数	2人	2人	2人	±0人

イ 第2学年の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
適応的の使用人数	22人	27人	23人	+1人
不適応的の使用人数	17人	17人	20人	+3人
病的な使用人数	8人	1人	0人	-8人

ウ 第3学年の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
適応的の使用人数	31人	42人	41人	+10人
不適応的の使用人数	21人	10人	8人	-13人
病的な使用人数	2人	2人	0人	-2人

エ 全体の依存度調査の割合の変容

	第1回目調査	第2回目調査	第3回目調査	第1回目との差異
適応的の使用人数	58%	76%	74%	+16%
不適応的の使用人数	35%	21%	25%	-10%
病的な使用人数	7%	3%	1%	-6%

オ 成果と課題

- 全学年において適応的利用者数に増加が見られた。また、全体の不適応的利用者数や病的な利用者数に減少が見られ、インターネット依存度傾向が改善された。
- 第2学年における不適応的利用者数に改善が見られなかった。原因として、第2学年はメディア使用時間が全学年の中で最も長く、メディア使用時間の長さが影響したと考えられる。

2. メディアコントロール週間の取組の効果の検証

本研究は、メディアコントロール週間の期間中及びその前後における学習時間、メディア使用時間及び睡眠に関する調査を行い、取組の効果を検証している。以下が調査結果である。

(1) 第1学年の変容

	就寝時間	起床時間	睡眠時間	前日の勉強時間	前日のメディア使用時間
コントロール週間前	10:39	6:12	7時間33分	1時間54分	1時間17分
コントロール期間中	10:17	5:48	7時間31分	2時間35分	47分
コントロール週間後	10:03	6:11	8時間7分	1時間40分	50分

(2) 第2学年の変容

	就寝時間	起床時間	睡眠時間	前日の勉強時間	前日のメディア使用時間
コントロール週間前	10:43	6:00	7時間17分	2時間13分	1時間12分
コントロール期間中	11:09	6:19	7時間10分	3時間6分	1時間18分
コントロール週間後	11:10	6:17	7時間7分	1時間42分	1時間13分

(3) 第3学年の変容

	就寝時間	起床時間	睡眠時間	前日の勉強時間	前日のメディア使用時間
コントロール週間前	11:08	6:10	7時間2分	2時間26分	1時間12分
コントロール期間中	11:51	6:03	6時間12分	4時間8分	41分
コントロール週間後	10:42	6:13	7時間31分	2時間4分	51分

(4) 成果と課題

- 第1学年と第3学年において、メディアコントロール週間とその前後におけるメディア使用時間に改善が見られた。
- メディア使用時間の改善に伴い、睡眠時間が増加し、生活習慣の改善を図ることができた。
- メディアコントロール週間やその前後における、生徒の生活習慣や学習習慣の変容を確認することができた。
- 第2学年において、メディア使用時間の変容に優位性が見られず、メディアコントロール週間の取組の効果が見られなかった。原因として、自己の力でメディア生活から切り離すメディアコントロール力が十分に身に付けられていないことが考えられる。

3. 睡眠の質の調査

本研究では、メディアコントロールにおける睡眠時間に加え、睡眠の質の調査も実施した。日本産業衛生学会産業疲労研究会(2002)の調査項目を本校の生徒向けに改訂し、7つの睡眠の質に関するアンケートを実施した。

アンケート項目は、①今週の寝不足感、②今週の集中力、③今週の眠気度、④今週の体のだるさ、⑤今日の起床時の状態、⑥昨日の寝付き具合、⑦昨日の夜中に目が覚めた頻度の7項目である。

質問項目を4段階で自己評価し、4及び3は「当てはまる」、2及び1は「当てはまらない」として、各学年の平均値を算出した。また、「当てはまる」と答えた原因の調査を行った。以下が調査結果である。

(1) 第1学年の変容

ア 質問項目に対する4段階評価の平均値(4段階は上述のとおり)

第1学年	今週寝不足	今週頭が重い	今週眠気が残る	今週体がだるい	今日起きられない	昨日寝付きが悪い	昨日夜中に目が覚めた
コントロール週間前	2.2	1.6	2.3	1.8	1.7	1.4	1.5
コントロール期間中	1.9	1.3	2.0	1.5	1.5	1.3	1.4
コントロール週間後	1.6	1.4	2.0	1.6	1.7	1.4	1.4
コントロール期間前後の変容	-0.6	-0.2	-0.3	-0.2	±0	±0	-1

イ 原因(人数)

	携帯スマホ	テレビ	漫画	部活疲れ	遅くまで勉強	その他
コントロール週間前	5	1	1	15	17	0
コントロール期間中	5	2	1	3	8	0
コントロール週間後	3	1	2	6	2	0
コントロール期間前後の変容	-2	±0	+1	-9	-15	±0

(2) 第2学年の変容

ア 質問項目に対する4段階評価の平均値
(4段階は上述のとおり)

	今週寝不足	今週頭が重い	今週眠気が残る	今週体がだるい	今日起きられない	昨日寝付きが悪い	昨日夜中に目が覚めた
コントロール週間前	2.0	1.6	2.5	2.0	1.6	1.3	1.2
コントロール週間期間中	2.1	1.6	2.3	2.0	1.7	1.4	1.3
コントロール週間後	1.9	1.7	2.1	1.8	1.8	1.2	1.3
コントロール期間の前後の変容	-0.1	+0.1	-0.4	-0.2	+0.2	-0.1	+0.1

イ 原因 (人数)

	携帯スマホ	テレビ	漫画	部活疲れ	遅くまで勉強	その他
コントロール週間前	9	4	5	14	9	4
コントロール週間期間中	6	5	3	2	15	0
コントロール週間後	9	3	4	10	5	0
コントロール期間の前後の変容	±0	-1	-1	-4	-4	-4

(3) 第3学年の変容

ア 質問項目に対する4段階評価の平均値
(4段階は上述のとおり)

	今週寝不足	今週頭が重い	今週眠気が残る	今週体がだるい	今日起きられない	昨日寝付きが悪い	昨日夜中に目が覚めた
コントロール週間前	2.1	1.6	2.2	1.7	1.7	1.4	1.3
コントロール週間期間中	2.0	1.7	2.2	1.7	1.8	1.4	1.4
コントロール週間後	1.5	1.5	1.8	1.5	1.6	1.3	1.2
コントロール期間の前後の変容	-0.6	-0.1	-0.4	-0.2	-0.1	-0.1	-0.1

イ 原因 (人数)

	携帯スマホ	テレビ	漫画	部活疲れ	遅くまで勉強	その他
コントロール週間前	10	5	4	16	7	0
コントロール週間期間中	2	0	2	1	11	0
コントロール週間後	1	0	1	2	4	0
コントロール期間の前後の変容	-9	-5	-3	-14	-3	±0

(4) 成果と課題

- メディア使用時間及び睡眠時間と、睡眠の質に関する相関関係を分析することができた。
- メディア使用時間が短縮され、睡眠時間が増加した分、結果的に健康被害の原因が情報端末機器であるという認識が深まった。
- 第2学年においては、メディアコントロール週間をとおした睡眠の質に変化は見られなかった。相対的に健康被害の原因が携帯やスマホである割合が高く、メディアコントロール力の育成が不十分であった。

V 本研究をとおしての成果と課題

- 本校生徒に対し、メディアに関する知識・技能の習得を総合的に推進したことで、メディアをコントロールしようとする意識や態度が身に付いた。
- 本研究をとおして、インターネット依存度傾向や、メディア使用時間が数値的に改善された。
- メディア使用時間が学習時間を下回り、生徒の生活習慣を改善することができた。
- メディアコントロール週間における取組の効果を詳細に分析することができた。
- コロナ禍にあって、家庭や地域向けの教育講演会の実施や小中連携の研修会の実施が不十分であった。今後、更に関係機関との連携を充実させていきたい。
- メディア使用時間が改善され、相対的に学力の定着が図られたかが不透明であった。学力との相関関係について、研究を深めていきたい。

(研究主任：黒木哲史)